



南北朝時代に越中最大の合戦の場となった氷見湊（湊川左岸が「北市」、右岸が「南宿」）

前号の「能登島金頸城合戦」発生以前に能登・越中で激しい攻防が繰り返されていたが、南北朝内乱期の越中国における最大の合戦として、観応3（1352）年6月14日の「氷見湊の夜襲」があげられる。これは足利尊氏・直義兄弟の対立から起こった室町幕府の分裂と、それに連動した全国的内乱である「観応の擾乱（1350～52年）」に際し、直義党に属し尊氏に反旗を翻した桃井直常が、直義の没落で越中守護職を罷免され、幕府方の追討を受けることになったのに始まる。

### 能登勢（幕府方）の氷見北市奇襲

越中の桃井方は、射水郡氷見湊に結集し、幕府軍の攻撃に備えていた。一方幕府軍は、将軍足利尊氏から

越中の凶徒退治の名目で軍勢催促をうけた能登武士が軍事力の中心で、6月6日能登守護吉見氏頼に率いられ、能登国を発向し越中国に進攻した。

能登勢は、最初射水郡横河保（現氷見市余川流域）の芝峠の下に陣を布いたところ、桃井直常・同直信・同民部少輔らの越中桃井軍が攻め寄せ合戦に及んだが、いったん撃退することに成功する。その後能登勢は、同月9日、同郡の木谷・獅子頭・三角山等（現氷見市内）の桃井方の城砦を攻撃した後、鶉塚に陣を布いた。

その頃、氷見の桃井軍が鶉塚の陣を攻撃するとの風聞が流れたため、同月14日の夜中、吉見氏頼率いる幕府軍の能登勢は、先手を打って氷見湊の敵陣に火を放つなどの夜討ちをかけ、桃井軍との間で激しい戦闘が展開され、双方に死傷者もでた。

湊川河口に開かれた氷見湊は、富山湾岸の要湊で、

桃井直常方の越中における軍事的拠点となっていたらしい。氷見町の中心部を流れる湊川には、大橋が架かっており、橋の北側の町並みは「北市」、南側は「南宿」とよばれ、市場町と宿場町から構成されていた。

そこへ、能登勢による氷見湊の夜襲によって、北市の家並みに火が放たれたため、北市に在陣していた越中桃井軍

越中南北朝の対立関係図

|                   |                                                                                              |                                                                           |                        |
|-------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|------------------------|
| 南北朝の争い<br>1336-92 | 持明院統（北朝）<br>足利尊氏～足利義満（光厳～後小松天皇）                                                              |                                                                           | 大覚寺統（南朝）<br>後醍醐～後亀山天皇  |
| 観応の擾乱<br>1350-52  | 足利尊氏党（幕府軍）<br>足利尊氏（征夷大將軍）<br>高師直（執事）                                                         | 足利直義党（反乱軍）<br>足利直義（副將軍格 尊氏弟）<br>桃井直常（越中守護）                                | 北畠親房、四条家、<br>新田氏、楠木氏など |
| 氷見湊の夜襲<br>1352    | 能登勢（幕府軍）<br>吉見氏頼（能登守護）<br>堀籠宗重（能登島東方地頭の<br>天野遠政被官）<br>堀籠七郎宗成（宗重弟）<br>斎藤六章房（得田保地頭の<br>得田素章子息） | 越中勢（桃井軍）<br>桃井直常（前越中守護）<br>桃井直信（直常弟）<br>桃井民部少輔<br>常門新左衛門尉<br>白井弥八<br>渡辺源八 |                        |

は、橋を渡って南宿に退却し、大橋の真ん中を引き落とし、能登勢の追撃を防いだ。このため夜討ちをかけた能登勢は、戦闘を中止し、いったん鶉塚の陣に引き上げたのであった。能登勢は、桃井方を攻撃するにあたり、夜襲の策を採っていたらしく、氷見合戦に先立つ6月8日に、桃井勢の拠る水谷城（現氷見市磯辺地内）を攻めた際にも夜襲を行っている。

## 三角山城の合戦

次いで6月15日、能登勢は八代荘内の三角山城（現氷見市稲積・指崎境界の城ヶ峰）に押寄せた。同城は、桃井方の越中武士の常門新左衛門尉の城砦で、ここで激しい戦闘が繰り広げられ、桃井方の白井弥八・渡辺源八が討取られた。二人の頸は、早速大將吉見氏頼の見参に入れられた後、余川流域の稲積河鰯の地に懸けられ曝された。またこの合戦で、能登島東方地頭の天野遠政の代理として、能登勢に加わり参戦していた天野被官の堀籠宗重の弟七郎宗成が、左肩を射られて疵を負ったのも知られた。

これに対し桃井勢は、三角山城の味方を救援するため、千久利・木谷・氷見・獅子頭（現氷見市内）の軍事拠点からそれぞれ同城に駆けつけ、能登勢を後方から攻撃した。このため再び激しい戦闘が繰返されたが、やがて能登勢によって桃井軍は撃退される。

その後7月1日に至り、能登勢は再び水谷城攻撃を敢行した。これに対し越中桃井勢は、城外に打って出て、同城北麓の尼坂で交戦に及んだが、能登勢に城内へ押戻され籠城することになる。こののち両軍の交戦は一時中断したが、8月12日に至り、三度能登勢が水谷城に攻め寄せ、再び尼坂の地で終日合戦が続いたが、桃井勢はまたもや城内に追い詰められることになった。

以後双方の間で、厭戦状態に陥ったものらしく、



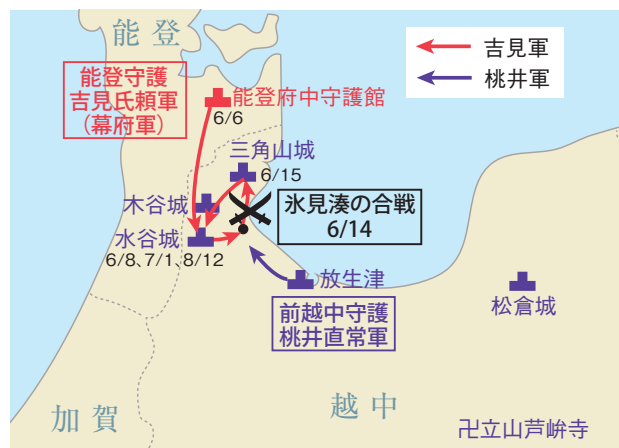
木谷城跡（『越中の古戦場を歩く』1991年北日本新聞社より 撮影：大志摩洋一）

大規模な戦闘は知られなくなる。しかしこの間、しばしば郡内の各地で、桃井方による「野臥合戦」とみえるゲリラ戦や、小規模な小競り合いがみられた。

## 越中の桃井と能登の吉見

次いで翌文和2（1353）年4月5日に至り、芝峠の下に陣を構える吉見氏頼率いる幕府方の能登勢に、桃井直常軍が攻め寄せ、合戦が再開された。当時、桃井直常追討のため越中に攻め入った幕府軍の軍事的拠点は、芝峠付近に置かれていたらしく、氷見湊を拠点とする桃井軍と射水郡内で対峙していた。その後の合戦の帰趨については史料を欠くため定かでないが、やがて勝敗が決しないままに、吉見氏頼軍は能登に帰国した模様である。しかし同年5月25日に、桃井直常の弟直信が、越中国新川郡の立山芦峯寺の寺僧中に、同寺の寺家年貢の免除と見返りに、桃井方への「同心合力」を勧誘しており、その文中に「当陣静謐」とみえる。このことから依然として桃井勢は、越中で優位な軍事的位置を維持しており、さらにその勢力拡大につとめていた事情がわかる。

当時の越中守護は、桃井直常に代わって守護の地位に復帰した井上暁悟（利清）であったが、勇将として知られた直常の軍事力には抗し難かった。そのため足利尊氏は、能登の武士に直接軍勢催促状を送る一方、能登守護で北陸の尊氏党として勢威のあった吉見氏頼に、能登勢を率いて桃井直常を討伐するよう命じていた。これまでに述べてきた氷見地域をめぐる合戦の経緯は、このとき吉見軍に加わって参戦した、能登武士の堀籠宗重と羽咋郡得田保（現志賀町土田地区）地頭の得田素章の子息斎藤六章房の軍忠状によって知られるものである。観応3年の越中の南北朝争乱は、やがて前号で紹介した、翌文和2年8月の能登島金頸城合戦へと繋がっていくのであった。



氷見湊の合戦図（能登吉見軍と越中桃井軍の進路）